卒業論文

災害時における多様な支援のあり方

――熊本地震・中間被災者の葛藤から考える――

2014 年度入学

九州大学 文学部 人文学科 人間科学コース

社会学・地域福祉社会学専門分野

2018 年 1 月　提出

要約

本論文では、熊本地震において、被災者と血縁関係があるが、震災当時は他県にいた人々を「中間被災者」という概念をもって論を進めていく。そうした中間被災者たちが、どのような葛藤をいだきながら「支援」と関わっていったのかを明らかにし、そこから見出される多様な支援の在り方について論じることを目的とする。

はじめに、被災者である当事者とそれ以外の非当事者の関係性を、トラウマという観点から表した宮地の「環状島モデル」を用いながら、熊本地震という大枠の中で中間被災者の概念を定義する。さらに、具体的に「支援」の 1 つである「災害ボランティア」と中間被災者の関係性に焦点を当て、研究を進めた経緯を説明した。

次に、「災害ボランティア」について理解するために、「災害社会学」についての研究と、「ボランティア」についての研究から、その間に位置する「災害ボランティア」の系譜をたどった。まず、「災害社会学」に関する先行研究を見ながら、国際的な視点からみた災害社会学の研究と、日本における研究の系譜を整理した。また、「ボランティア」についての研究から、時代背景をおさえつつその出現と発展の経緯をたどった。その上で、「ボランティア元年」といわれる阪神・淡路大震災や、災害ボランティアの文脈で重要となる東日本大震災をめぐる議論を整理し、「災害ボランティア」を捉え直した。

続いて、今回筆者が行った聞き取り調査の概要についてまとめた。分析においては、聞き取りを行った 4 人の中間被災者たちの語りの内容を、震災発生時の動揺、ボランティア活動者の語り、ボランティア未活動者の語り、震災前後の変化、今後災害が起こった際の対応の 5 つに分類した。熊本地震への意外性や、中間被災者としての立場観、ボランティアの有無を問わない葛藤、葛藤を経ての変化が明らかになった。

最後に、分析結果から見出された 3 つの観点からの考察を行った。中間被災者ならではの心配や不安の存在、普通の人からは想像しにくい中間被災者の複雑な立場観、そうした立場観に基づくボランティアへの姿勢について考察を行っている。特に 3 つ目のボランティアの姿勢に関しては、先行研究で示したような「ボランティアをするべきか否か」ではなく、「ボランティアをしたいか否か」という観点から捉え直し、そこから多様な支援の在り方と、中間被災者のもつ可能性について論じ、結びとした。

目次

はじめに 1

1　問題の所在 3

1.1　中間被災者の位置 3

1.1.1　環状島モデルの形成

1.1.2　傍観者の分類と中間被災者の定義

1.2　中間被災者における支援との関わり方 5

1.2.1　中間被災者と支援

1.2.2　支援とボランティア

1.2.3　ボランティアへの解釈

2　先行研究の整理 7

2.1　災害社会学についての先行研究 7

2.1.1　国際的にみた災害研究のはじまり

2.1.2　日本における災害研究

2.1.2.1　明治時代以降の先行業績

2.1.2.2　1970 年代からの災害に関する先行研究

2.1.3　災害社会学に関する先行研究のまとめ

2.2　ボランティアについての先行研究 11

2.2.1　ボランティアの系譜

2.2.1.1　近代という時代

2.2.1.2　ボランティアの出現

2.2.1.3　ボランティアへの注目

2.2.2　ボランティア元年

2.2.3　ボランティアをめぐる議論

2.3　災害ボランティアについての先行研究 15

2.3.1　阪神・淡路大震災以降の動き

2.3.2　東日本大震災

2.3.2.1　阪神・淡路大震災との相違

2.3.2.2　ボランティアの「一般化」と「標準化」

2.3.3　熊本地震
2.3.3.1　熊本地震における社会学的考察
2.4　先行研究まとめ 19
3　中間被災者の意識調査 21
3.1　課題の設定 21
3.2　調査の設計 21
3.2.1　調査方法
3.2.2　調査対象者
3.3　結果と分析 22
4　考察 42
［注］ 47
［参考文献］ 48
［付録］ 50